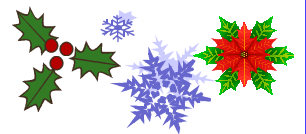




# 雲の上にはいつも...



【No.9】藤城小学校 校長室より（不定期刊）

## えっ？「きゅうくつな幸せ」?! そんな幸せってあるの？



「せめて二階の天井くらいは低くしたかった」「言えない」「言わせない」・・・。某住宅メーカーのCMである。低いよりは高い天井のほうがいい。狭いよりはゆったりしているほうがいい。快適な空間が幸せにつながるという発想。まあ、だれもがうなずくところでしょう。

あたたかいこたつ／家の家族は五人／「五角のこたつならいいなあ」／と、おねえさん／一番あとからはいる かあちゃんは／私と同じ所／私はやっぱり／四角でもいい（『青い窓』より）

これは福島県郡山市で50年続いている児童詩誌『青い窓』に載った5年生の詩です。お母さんと肩を寄せ、並んで座る少女の幸せと安心感がほのぼのと伝わってくる。創刊より中心として活動した詩人 佐藤浩は、この詩に触発されて1行の詩を創った。「きゅうくつな幸せを忘れていました」と...

そうだよなあ。じわっとしみる幸福感って、便利で快適な生活を追い求めるだけでは得られないよなあ。この詩からあふれ出ている「ちょっときゅうくつな幸せ」がもつ安心感。私は今、その安心感をはっきりと思い描き、「うん、うん。一緒にいるのって、ほんと いいよなあ」と幸福感を再確認しています。



家族の息づかいや体温が感じられる関係性。一見、依存(いそん)しているかようにも見える関係性の中にこそ「幸せ」があるのでしょうか。メーテルリンクの戯曲(ぎきょく)『青い鳥』の話のように、チルチルとミチルが旅の中で探し求めた幸せの青い鳥は、じつはいちばん身近にいたんだと。長い旅の中で教えてもらったこと。それは、生きている者が思い出しさえすれば、いつでも亡くなった人は目を覚まし、会うことができるということ。どんなに悲しいときでも子どもとキスさえすれば涙は星に変わるといふこと。人間は何かひとつ自分の運命(使命)をもって生まれるということ。そして、幸せとは気がつかないだけでごく身の回りに潜(ひそ)んでいるもの。しかも、自分のためだけでなく、他人のために求めるとき、はかりしれなく大きくなるんだということ...

## 「ちょっと きゅうくつな幸せ」は 子どもを「自立」させる

子どもたちは毎日、大人に近づいています。言い方を換えれば「自立」していつているということです。心理学者の河合隼雄さんはおっしゃってました。「自立とは独(ひとり)りで生きることではない。まして孤立(こりつ)ではない。自立している人とは、適切な依存(いそん)ができて、そのことをよく自覚している人なのだ」と。だとすれば、はじめに述べた「ちょっときゅうくつな幸せ」が子どもたちを「自立」させていくともいえるのです。

12月は人権月間。昨日、『人権集会』をもちました。それぞれの学級の「人権目標」の中間報告という位置づけの取組です。「笑顔」「なかよく」「思いやり」「人を大切に」「個性」といった言葉が多い「人権目標」。どの学級も未達成でした。考えてみればこれは当然のことで、多くの子どもたちが一緒に生活している以上、必ずめ事(トラブル)は起こります。では、何が大切なのか。最初の発表の1年1組から、ちゃんとわかっています。「人のいやがることをしない」「相手の気持ちを考える」と。

子どもたちは決して未熟ではありません。みんなで生活していくときに必要なことは、ちゃんとわかっているのです。右の言葉は、先日の掲示板(校長からのメッセージ)に載せたものです。「己の欲せざるところは 人に施すことなかれ」。今一度、この言葉を唱え、気持ちを確かにしましょう。勇気をもって前に進まなきゃ未来は変わらない。そう、どんなことだって達成するまでは不可能に見えるんだから。

おのれ ほう  
己の欲せざるころは  
ひと ほう  
人に施すことなかれ  
おのれの ほうせざるころは  
ひと ほう  
なかれ  
自分が他の人からしてほしくないことは  
(他の人も同じようにほしくないから)  
他の人からしてほしくないこと

